
三大将が幻想入り

DA亥大将

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三大将が幻想入り

【Nコード】

N6828J

【作者名】

DA亥大将

【あらすじ】

大人気アニメのワンピースから出演します。

大将三人が、幻想入りしてしまい、幻想郷で

大暴れする話

だと思っよ。

以上

第零次（前書き）

これは、東方&ワンピースの融合二次創作なので、そういう系が嫌いな方は、みないでください。
お願

では、どうぞ……

第零次

ここは、マリンフォードの海軍本部。

中は足音しか聞こえないくらい静かだった。

カツカツ

「まったく・・・なんの用なんだろうね」

黄猿はめんどくさそうにいつて。

「大将三人が同時に呼ばれるなんて、前代未聞じゃあ」
自慢げに赤犬は、いつた。

『だるい』

青雉は・・・いつもと同じだ。

この後、三人はだまってセンゴク元帥の部屋にむかった。

「ここが、センゴク元帥の部屋か・・・シンプルだね」

「そんなこと言っちゃいかんでしょう。サカズキー」

赤犬と黄猿は、二人でベチャクチャしゃべっていた。

そのころ青雉は、、

『だるい』

・・・・・・かわらなかった。

サカズキが

「そろそろ入ろうかのう」っといった。

そしたら、黄猿が、

「もっしもし、こちら三大将、今到着しましたせ」。

といったら、急に扉が開き始めた。

「へーこの部屋自動ドアだったんだね。だからこんなにシンプルなのか」

アハハハハ。」

何か知らないけど赤犬は一人でうけているようだ・・・
そのとき、奥から、「入れ」というセンゴク元帥の声が、聞こえ

た。

三人は同時に

「『了解』『』って、部屋にはいつていった。

三人は立ち止まり、イスに腰をかけた。そして、センゴクに顔をあげた。

「君たちに来てもらったには、ほかでもない・・・いまから、異世界に

行ってもらいます。そして、今から渡すファイルに入っている名簿表の

人物を、全員消す・・・いや、封印してもらいます。」

三人共、暇そうにして話を聞いていました。

「・・・びつくりしないの？」

センゴクは残念そうにいました。

「ないを、びつくりしろと言った。だいたい、どうやってその異世界にいくというんだ」

赤犬が、そういうとほかに二人も首を上下にコクコクしていました。

「ハアー・・・」

なぜか、ため息をするセンゴクであった。しかし、その背後には、悲しみもみえた。

そしてファイルも配った。

「まー気を取り直して、異世界の行き方は・・・そのでっかい扉を、ぬけたら、

すぐだZ.E。」

三大将は扉をみた・・・確かにでかいでも、なんか小さくもみえる。目に錯覚か？

「で、行き方はわかったけど、どうして異世界の住民を封印せにやならんのじゃ？」

赤犬は、なんとなく、質問した。

「それは、貴様らが、皆封印して、無事帰ってきたらはなそう。」

三人共、なんだそれって顔をしていた。しかし、

「無事ってどういう事？」

青雉は即座に答えた。

セングクは、にやっと笑い、すぐまじめな顔にもどしてこたえた。
「そんなの簡単だろ……。この世界じゃなく異世界の住民なんだから、

強いに決まってるぞ、あと、あっちの世界は、幻想郷といってな、闘い方がきまっておって、スペルカードというカードのような武器のような

ものを使うから、気をつけろよ……。」

三人共あらそうってという顔をしていた。

「あと、名簿にのってる人物を、消す、じゃなくて……。封印するとその人物の

名前がその倒したやつの名前の色がつくからな」。

例えば 青雉Ⅱ青

黄猿Ⅱ黄

赤犬Ⅱ赤

となるから、帰ってきたとき、だれがぜんぜん闘ってなかったか、すぐわかるからな」

と脅しをかけるかのように付け加えをした。

「まーとにかく、出てきた敵は排除すれば、いいんでしょう。」

黄猿はいった。

そのとき突如赤犬が「そういえば、どうやって封印するの？」っと質問した。

セングクは不意を打たれたかのようにいった。

「それを教えんとかんかったな。えーと、敵が瀕死ぐらいになったらファイルの中にカードみたいな物を、その敵になげてくれ。一人につき

カードみたいなものが、100枚くらいはいつてるはずだ。確認してくれ。」

三人はさっきもらったファイルの中を見てカードが100枚くらい

あることを確認した。

「あと、地図の使いかたを説明するぞ・・・まず三人共ファイルから地図を出してくれ」

三人共だして、地図を見た。

「この地図に10個くらい赤く光る場所があるだろう。それは、ワープポイントといって、

1度だけ、そこにワープができるぞ。ワープの仕方は、行きたい所の赤く光る場所に

プッシュすれば、もうワープしちゃう、優れものだ。

一度押した所は、あ赤から透明の色？にかわるから名簿と同じで、わかりやすい。

あと、赤く光る所の下に番号があるから、それを順にたどっていけば、全員封印が

できるはずだ。」

今度は、黄猿が、この地図、シンプルすぎて細かい所が、まったかわからんよ」といった。

即座にセンゴクが、答えた。

「大丈夫だ。この地図は一時きにプッシュしたところの最終地点まで、目玉が飛び出る

くらい細くなるから道に迷っても大丈夫だ、あと、地図が細くなるとその場所に

名簿リストにのっていつてるやつだけ、地図上で青く光るから場所がわかる・・・

だけど名前はわからん。

まゝ無駄道通るよりかはいいだろう。あと、敵を倒したら、ソイツがいた場所から青い光が

消えるので、そのズームインした地図から青く光る物が全部消えたら、次にワープすれば、

いいんだよ。

わかった？」

「ハ―イ」 三人は元気よくいった。

「じゃー・・・さっさといって用をすませて、かえってくるか」
「そうしよう」

三人が動き出そうとしたときセンゴクが「待つんだ」といった。

三人は立ち止まり、振り返り、赤犬が、

「なんじゃねん」といった。

センゴクが、「殺すなよ・・・間違っても、殺すなよ」といった。

「了解」と赤犬が答え、また三人は歩き出した。

扉の前まできて、三人は深く深呼吸をした。おして、

黄猿が「いくよ」幻想郷に」といって、扉を開けた。

ゴゴゴゴゴ・・・

扉はものすごく鈍い音をだして開いた。

「Let is go 幻想郷」

三人は扉の中の闇の中に消えてしまった。

センゴクは、一人寂しくつぶやいた。

「すまな」っと・・・

第零次（後書き）

ご読書ありがとうございました。

なんか、かいてみました・・・実際に見てグチャグチャだったでしょう。

なんか、すいません。あと尾田先生すいません。

My class の友達が小説をかいていたにで、かいてみましたけど、

まゝ初めて書くから許してください。

あと、このあとどうしたいですか？

僕もいろいろと考えてるけど、いいアイデアがおもいつきません。こしよければ、コメください。書くことは、なんでもいいです。

ため口だろうと、悪口だろうと、かまいませんから

コメよろしくおねがいします。あと、次の展開のアイデアください。

まことによりしく願います。

b y D A 亥大将

第壱次 一章（前書き）

なんか、つかれたけどがんばってかいたよ。
二次創作が嫌いなかたは見ない方がいいとおもうよ。
では

第壱次 一章

「・・・・・・・・ろ」

誰かが誰かにはなしている・・・もしかして俺にはなしているのか？
青雉は、そんなことを思っていた。

「あ・・・・・・・・じ・・・・・・・・きろ」

また、声が聞こえてきた。

「おきろつて、言っただろうがあああああああ」

青雉は、ぶつとんで起きた。

「なんですか、赤犬さっ・・・・・・・・んてここはどこ？」

青雉はビックリした口調で聞いた。

「そんなの幻想郷に決まっちゃるだろうが・・・・。」

「・・・・・・・・What？」

「What？・・・・・・・・じゃねえだろうが。」

二人は、べらべらとしゃべっていた。

そのとき、黄猿が

「そういえば・・・妖怪の森にはじめは行くんじゃなかったっけ？」

二人共それを忘れてたみたいな顔をしていた。

「そうじゃったそうじゃった・・・・・・・・忘れとったわ」

赤犬は、地図を開けながらそういった。

「たしか、この妖怪の森の赤く光る所をおせばいんじゃったな・・・

では、押すぞ。」

赤犬はそういうと即座にボタンを押した。その瞬間、周りが黄色くなり

やがて、その黄色い壁が消えるときとはまったく違う場所にいた。

そして、地図を見ると妖怪の森の赤い光が、消え地図がより深く見やすくなった。

「え」と、この地図を見ると・・・紅魔郷って所に5人、湖に1人、

この森に1人だから、

ここから、湖にむかって、紅魔郷に向かえばこの地図の封印するものは、いなくなるよ」

つと黄猿がいだした。残りの二人も賛成してくれた。

「じゃーまず名前がわからんが、この森にいる奴を、仕留めて湖にむかおう。」

「そうじゃな」

行動がきまった。まずこの森の地図で青く光る場所に三人共向かった。

敵の居場所はそう遠くなかった。

約30分後

誰かに遭遇した。

「お前は、食べてもいい人間なのか？それとも食べちゃいけない人間なのか？」

つと急にいわれた。

三人は、地図をみた。そうすると丁度三人の目の前が青くひかっていた。

そうすると、赤犬が

「お前名前はなんと言っ？あと、食べれないなお前じゃ。」
といった。

そうすると、

「そーなのか？あと名前はルーミアだよ。」といった。

赤犬は、リスト表をみた・・・やっぱり、名前がのっていた。

「じゃーいただきます。」とルーミアが噛み付いてきた。

そうすると、赤犬が瞬間的にルーミアをけつとばした。

ドゴン・・・バキボギ

とても鈍い音がした。

「よくもやったなあ。ルーミアは怒ったぞ。」

そういうと、内ポケットから、カードをだした・・・そうすると。
「夜符【ミッドナイト・バード】」

そしたら、ルーミアの周りから、黄色くて丸い物体ができて飛んできた。

ピュンピュン

赤犬は直撃した・・・しかし赤犬は

ドロドロっと音をたてながら復活した。そう忘れてはいけない赤犬・・・いや三大将は

みんな悪魔の実を食べていて、しかもその中でも珍しい自然系【ロギア】であるから、

物理的攻撃は、受け流してします。しかし幻想郷にはそんな実があるわけではないので

ルーミアが驚いていた。

「そういえば、センゴクが、妙なカードを使って闘うっていったが・・・このことか」

「いって、一人でブツブツいっていた。」

「な・・・なっ、なんでルーミアのスペルカードが効かないの？」

「というと、赤犬が

「ワシは、【マグマグの実】を食べた全身マグマ人間・・・だから、お前の

攻撃・・・いやここの住民の攻撃は避ける必要がないんじゃない。」

「つというと、ルーミアは啞然としていた。そして

「そーなのか」といった。

「わるいがこれで最後だ。」

次の瞬間右腕がマグマになって、でかい拳を作っていた。

「ルーミアだつて負けないもん」

「というとまた内ポケットから、カードをだした。

「くらえ闇符【ダークサイド・オブ・ザ・ムーン】」

また、弾がとんできた。

「そうか、残念だ・・・大噴火」

ドゴーンという音がした。赤犬は大噴火でルーミアの弾幕ごとルーミアを、

吹き飛ばした。

ルーミアの体には溶岩がめつとりついた。

「うううう・・・あ、あついううう・・・ドサ」

あまりの熱さに気絶した。そうなる赤犬が近づいてポケットから、センゴクから

もらったカードをだして、また「残念だ」といってカードを投げた。

そして、光がでてきてルーミアを包みカードの中にもってかれた。何も書いてないカードにルーミアの名前と絵が浮き出てきた。

リスト表のルーミアの部分が赤く光った。

「これで封印完了・・・か？」と赤犬がたずねた。

「そうですね」と青雉がいつて、湖にむかった。

三人は歩きながら話していた。

「サカズキィ。さっきの闘いどうだったん・・・ええ」

「見てのとおり余裕だったじやろう。」

「でも、あれがスペルカードってやつかね？」

青雉が質問した。

「たぶん・・・しかしアイツが持ってたカードは属性がなかったが、ほかの奴が持つてる

カードには属性があるかもしれんのオィ。」

「おれは火属性に気をつけないとな」

青雉は自分で確認した。

「わっしは弱点がないよ」

た、たしかに。

「まゝ何とかなるでしょう。」と青雉がいつて会話が終わった。

約1時間後

ようやく湖についた。

「な、なんだこれは？・・・クザン、お前実は一回ここに来たことがあるんじゃないのか？」

「そんなわけありますか。」

「で、でもこんなことできるやつなんてお前ぐらいじゃろう。」

三人は驚いていた。何故ならこの滅茶苦茶広い湖が冬でもないのに、一面全て凍って

いたからだって。

「もしかしたら、地図上のこちら辺で青く光ってる奴の仕業じゃないにか？」

「そうになると、クザンと似た能力な奴だな。」

「そのときは、俺が闘おう」と青雉が言った。

そのとき、

「なによ、あんた達。あたしの遊び広場に何しに来たのよ。」

つといわれた。

三人は「なんだこいつ」って思ってた。

地図を見ると・・・ビンゴ。目の前が青くひかっていた。

「お前は名前は？」と青雉が聞く。そうすると

「あたしの名前はチルノ。幻想郷で一番強いだよ。」

あらそう・・・見たいな顔をしてリストを眺めているとこれもビンゴ。

「この湖はお前がやったのか？」とたずねる。

「そうよ。すごいでしょう。」といった。

青雉がやっぱりなみたいな顔をして考えていた。なにを考えてるかっというところ

どう戦闘に持ち込むかだ。まづ自分から先制布告をするかと思った。そうすると

青雉が近くの雑草を手でちぎって自分の息をかける。

フウウウウウウ

そうすると雑草が凍って剣になった。

「氷河軍刀【アイス・サーベル】」

「な、なによ」

「命は獲るきはなかったが・・・」といい、チルノに襲い掛かってきた。

チルノは間一髪でよけた・・・がこけた。

「いててて。もーなにするのよ」

「すまねーが、死んでもらうぞ。」っと即座の答えた。

「ならくえ、氷符【アイシクルフォール】」

ルーミアみたいにカードを使ってチルノの周りに弾ができてきた。氷の塊りでもとがっていた・・・。

「くえ」っとチルノが言うとその氷の塊り飛んできた。

「しかたねえな・・・両棘矛【パルチザン】」

氷と氷がぶつかりあった。

「なんで、あんたも氷が操れるのよ？」

青雉が「お互い様だろ」といった。

その瞬間青雉はチルノの後ろにまわっていた。

「・・・え？」チルノは青雉が何処へいったかわからなくなった・・・バカだから

消えたと思っている。

「すまねーな、お嬢ちゃん。」というとき青雉はチルノの手をつかんだ。そうすると

「氷河時間【アイス・タイム】」

カチカチつと音とともにチルノは凍っていつてしまった。

凍ったチルノに向かって「すまねえなお嬢ちゃん」といって、カードをなげた。

ルーミアと同じように光に包まれてカードの中にもってかれ、リストのチルノの部分が青く光った。

「よしこれで二人目だな」っと青雉がいつて、紅魔館に向かった・・・

また歩きながら話していた。

「次は紅魔館か……連戦になるなこれは」

青雉は面倒くさそうにいった。

「まっちゃっちゃと終わってかえればいいんじゃない？」

「そだね」

1 時間後

「ここが……紅魔館」

「たしかに紅魔って感じるね」

もう目の前には紅魔館がある。紅魔館の壁は赤ではなく紅い色をしていて

まさに悪魔がいそうな感じがする建物であった。

「裏から入るより、正面突破したほうがいいな」

三人は正面にむかった。

「ん……誰か正面の門にいるぞ。門番か？」

「門番とは警備が厳しいのう」

黄猿が地図を見ると……この門番もアウトだった。

「わっしが出ましよう……すぐもっどってくる。」といって門番のところに行った。

門番は誰かがこっちに向かってくることに気づいた。

「だ、誰ですか？あなたは」

「わっしは黄猿、あんたは？」とこえすと

「私は紅美鈴……ここになんのようですか？」と言った。そして黄猿は

「よう……ね。しいて言うなら、紅魔館つぶし？ですかね？」
そう言うと美鈴の目つきが怖くなり

「てことは侵入者。中に入りたくば、私を倒してからすすめ。」

と黄猿さんはいわれました。

「これは困ったねえ．．．まゝどの道美鈴さん。あんたとは闘わなきゃいけないけどねえ」

「なんだか知らないけど、いきます。」

ポケットから、カードをだして「華符【芳華絢爛】」と叫ぶと美鈴の後ろに

いろんな色をした弾幕ができ、とんできた．．．しかし

「速さとは重さ．．．。光の速度で蹴られたことはあるかい？」

なぜかしらないが、後ろから黄猿の声がした．．．そう、黄猿は美鈴の後ろにいた。

美鈴が振り向くと、とても重たい蹴りをくらった。

ドドドドドつと音とともに美鈴はふつとんだ。

「うううう、な、なんで後ろに？」

美鈴は混乱していた。自分より強い蹴り、そして自分より速い体術なんて見たことがなかったからだ。

「もっしもし．．．あれ、おつかいねえ。もうお陀仏かい？」

「ま．．．まだだ。」

「くらえ虹符【烈虹真拳】」

そういうとまた弾幕が飛んできた。

「拳じゃないでしょう。」と黄猿はつつこみもいれる余裕もみせた。

ドゴーン．．．弾幕は黄猿に直撃した．．．しかし

「いやゝ。ビックリしたねえ。」と少しシャクレながらいった。

「な、なんで私の弾幕がくらわないの??？」

「あつしは、ピカピカの実の光人間．．．くらったら光とともに再生するから、意味ないよう。」

「な．．．んだっ．．．て。」

「さつさとENDにしようかあゝえ？」つとつと黄猿は美鈴に指をさした。

そして、指先が光って美鈴に向かってレーザーがでた。

「がつ・・・うう・・・く・・・そ」

レーザーは美鈴を何回も貫いた。そして、
ドサッ　とうとう倒れた。

黄猿は美鈴に近づいて無言でカードをなげた。光が美鈴を包みカー
ドの中にもってかれた。

リストの美鈴の部分が黄色く光った。

「よし、終わったよあゝ。」といいながら、二人の所に戻る。

「さてと、紅魔館に殴りこみにいけますか」

「そうじゃのう」

三人は紅魔館のなかにはいつていった。

続

第壱次 一章（後書き）

なんか、つかれた。

第壱次はたぶん5章ぐらいで終わると想つよ。

じゃ、次回も期待しないでまってるね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6828j/>

三大将が幻想入り

2010年10月10日00時07分発行